

硬式野球部

部員数 : 3年生・6名、2年生・8名、1年生・7名、
マネージャー・1名 計22名

技術指導者 : 4名
(山崎 滋彦、黒滝 敏明、馬賀 大祐、大川 靖光)

活動日 : 火曜日～金曜日 グランド練習
土・日 練習試合／グランド練習
月曜日 休み

目指すチーム : ・一生懸命に野球を楽しもうとするチーム。
・どんなミスをしても次の状況を考え、行動できるチーム。
・チームで勝つという目標に取り組めるチーム。

第 96 回神奈川大会 夏の大会 ～ 大楠高校野球部のゼロからの出発 ～

平成 26 年 7 月 17 日、梅雨が明け、蒸し返すような暑い夏の日、大楠高校野球部の夏の大会は始まった。1 回戦の相手は、毎年 4 回戦まで勝ち進む県立の強豪・市ヶ尾高校。そんな相手にも怯む様子もなく、初回から連続ヒット、四球とチャンスをつくり、2 死満塁で 6 番打者の 3 年生が、タイムリー 2 塁打を放った。彼は、ベース上で笑顔を見せるどころか、次の塁へ、次の得点へとさらに集中力を高めていた。ベンチ内の選手たちも次の打者に声をかけ、凡打した選手を励まし、勢いにのせようと盛り上げていた。この大会に懸ける全員の想いがひしひしと伝わってきた。

現在の 3 年生が、入学した当時は、人数を揃えて大会に出場することがやっとのチームだった。人数が少ない中でも、野球が大好きで、野球がやりたい。それも『高校野球』をやりたい。彼らは、この想いだけで続けてきた。彼らは 2 年生となり、新入生を迎え入れ 16 人となったチームは、勝ちを目指す努力をはじめ、チームは徐々に力をつけていった。しかし、先輩が引退し、最上級生になった初めての大会期間中にとっても悔しい気持ちを味わった。やりきれない想いで一杯だった。でも、その悔しさをきっかけに変わろうとしていた。何度もミーティングをかさね、チームの想いを一つにしていっていった。野球部だけでなく、学校や地域の人からも応援されるチームになるため、練習前に地域の清掃活動も積極的におこなうことをはじめた。つらい走り込みも自らに課していた。それはけっして、簡単ではなかった。部員同士で衝突することもあった。プレーでうまくいかないときは悔しくて、言葉にできない想いを別の物にあたろうとしたこともあった。でも、その度にチームで多くの想いを共有する高校野球がやりたかったことを思いだし、努力を積み重ねていった。

気づけばこの大会では、どんな相手にもチーム一丸となって勝利するという目標だけをみて、プレーをするチームとなっていた。先制した後、2 回に逆転されてもその気持ちは変わらず、むしろ勢いを増していた。その気持ちの強さから、5 回の攻撃で同点に追いついた。しかし、試合後半に入った 6 回、少し気持ちを緩めた隙に相手に勝ち越された。ゲームはほぼ決まった状態になってしまったが、彼らは立て直そうと、最後までチームで勝ちにいく努力を続けた。無情にも試合が終わり、相手校の校歌が流れ始めたが、3 年生は堂々と胸を張り、整列をしていた。その姿は、大きくキラキラと輝いていた。2 年生の目には涙が溢れていた。その時、これで高校野球が終わる 3 年生ではなく、次のある 2 年生が悔しさと寂しさで涙を流せるくらい、チームとしてまとまれたのだと実感させられた。

試合後、球場まで足を運んでくれた大勢の有志の応援団や保護者の方々が彼らに駆け寄ってきた。3 年生たちは、しっかりと感謝の挨拶を述べた。その後ようやく、涙をみせはじめの選手が出てきた。試合が終わって、30 分も過ぎた頃、ようやく実感が湧いてくるほど、高校野球に没頭できている彼らのすばらしい成長が、とてもまぶしく、嬉しく感じた。

彼らは、悔しいことも成長するためのきっかけにしようと、自らの意志でやり通した。この経験こそが、彼らの今後の人生にとって、強さとなって生きつづけていくと確信した。この夏、そんな彼らのいる、チームに関われたことを感謝したい。



夏の大会を終えた翌日の7月18日、新チームはミーティングから始動した。まだ大会の悔しさや寂しさが心に残っている中、1、2年生たちはチームの方針を話し始めた。テーマは、「どんなチームになりたいか」だ。さまざまな意見が出てきたが、共通して口にしてきたことは、3年生のように元気のあるチーム。勝つことを目標とするチームであった。そのために、選手同士でコミュニケーションをとり、声かけを多くし、礼儀やマナーを大切に、多くの人から応援されるチームになることから始めることに決めた。その第1歩として、夏の大会中の横須賀スタジアムでの大会補助役員を一生懸命に務めあげた。

7月22日、ギラギラと太陽が照りつける真夏日、グラウンド整備と校内清掃、地域清掃を終え、15名全員でランニングすることから、練習は始まった。1ヶ月後の地区予選突破・県大会出場を合言葉に、まずは元気よく声を出すことから始めた。マネージャーが見守る中、全員が大きな声を出していることを確認できるまで、何度もやり直して、選手たち自身が納得するまで走り続けた。それから、選手一人ひとりの体力や技術にあわせて、ゆっくりと時間をかけながら、一日中基本練習・実戦練習をおこなっていた。当然うまくいくことばかりではなく、暑さと疲労で体力的につらいといった表情を浮かべる選手もいた。怪我でプレーができない選手が増え、予定していた練習を変更するしかなく、元気がない雰囲気も蔓延したこともあった。そのたびに練習を中断し、今日の練習をやめるかどうかをチームとして考えていった。練習をやめて、明日から切り替えて練習をする選択も決して間違いではない状況でも、選手たちはその場で気持ちを持ち直して練習することを選んでいった。その度に、態度や表情が裏腹でも、選手たちはうまくなりたい、勝てるチームになりたい、秋の県大会に出場したい、心の奥にそんな向上心を、強くもっているのだと感心させられた。

8月も中盤に差し掛かった頃、練習の成果を確認するべく、練習試合をどんどんとこなし始めた。結果は、勝ったり、負けたりだったが、1試合ずつ課題を整理し、次の試合に修正していった。試合をしていて感じたこのチームの素晴らしいところは、練習でやっていることをそのまま実践できることだ。これは当たり前のように感じるが、練習でやっても試合の中でそのまま実践することは難しい。どうしても失敗する恐怖心や自信の無さが勝り、躊躇してしまうことがよくある。しかし、彼らはまずトライすることを優先している。それは、彼らの大きな長所であると感じた。

8月22日、いよいよ秋季地区予選が開幕した。1戦目の相手は、海洋科学高校。この1ヶ月練習で重視したことは、お互いに声を掛け合い、エラーやミスをしてでも次のことを考え、すぐに行動すること。そして、カバーを心がけ、共有した戦術をトライすることだった。これらを見事に実践することができ、7回コールドで勝利した。2戦目の相手は、強豪私学で技術的にも格上の三浦学苑高校。1戦目と同じように実践しようとするが、力及ばず1戦目とは逆に7回コールド負け。ただ、数少ないチャンスで得点をあげ、重視して練習していたことも最後まで実践しようとする集中力を持続させていた。次への可能性を感じさせる一戦であった。そして3戦目。相手は、逗子開成高校。この試合に勝利したチームが2校ある県大会の最後の切符を手に入れることができる。選手たちのモチベーションも高く、サインや戦術の確認にも余念がなかった。しかし、試合がはじまり、1回表の相手の先頭打者の意表をつくセーフティーバントにいつものリズムを崩され、こちらのリズムをつくる前に5回終わって7失点。ただ、彼らも諦めず、練習してきたことを積み重ね、着々と得点を重ねていった。最終回も粘りをみせ、3点差まで

追いつき、なおも2、3塁のチャンスをつくった。しかし、そこで力及ばず敗退した。残念ながら、地区予選敗退となってしまったが、この大会期間中に彼らは、自信を失って、落ち込んでいる選手を他の選手達が、しっかりと支え、気持ちを引っ張り上げていた。また気持ちが落ちてしまった選手もそれに応えるべくすぐに立ち直って、雰囲気上げていた。エラーやミス、凡打をしても、次のプレーを考え、すぐに行動に移す選手の姿を何度もみることができた。たった1ヵ月足らずの練習期間であったが、彼らが決めた目指すチームへしっかりと向かっていた。また、試合後のミーティングを終えた選手たちの中には、悔しくて涙を流す選手、ショックで立ち尽くす選手がいたり多くの選手が大きく悔しさを感じていた。そんな彼らを見て、泣けるほどの悔しさを感じるくらいに彼らは高校野球に集中し、努力をしたのだと感じた。同時に濃密な1ヶ月間を一緒に過ごし、夢をみられるチームになったことに喜びと感謝の気持ちを抱いた。この大会を終え、彼らはチームで一気に成長し、高校野球をやる充実感を知り、チームで勝つ喜びと負ける悔しさを知った。きっとこの経験をエネルギーに変え、さらにチームとして成長することを選んでくれるだろう。次の春の大会に期待したい。



春の大会へ向けて ～ うまくなることをあきらめない ～

秋季大会をおえて、夏の練習の疲れがでたのか、目標を失ってしまい野球への意欲がうすれたのか、新学期が始まり野球漬けの毎日からリズムが変わり、指導者がグラウンドにいない時間が増えたからなのか・・・おそらく全てが少しずつ部員一人一人の心身にのしかかっていったのだろう。チームの雰囲気は、けっして良いと言える状態ではなかった。練習中に集中力が欠けたプレー、イライラ感、やる気のない態度が目立っていった。選手同士がぶつかることもあった。指導者の声が届かないこともあった。ただ、それでも彼らは、野球が好きだから、上手くなりたいから、勝ちたいから・・・だから、練習は休まない。彼らなりにがんばろうと、もがいていたのだ。だからこそ、それをどうにかしようと指導者たちは、選手から話を聴き、指摘やアドバイスを続けていった。練習メニューも夏休みの量を維持し続けた。しかし、チームはかみ合わず、バランスが壊れたまま10月が過ぎた。やる気のない態度を個々に指摘すると、ついには部を離れる選手もでた。今のままでは駄目だと思い、練習をしばらく休みにするか、練習量を減らす決断をしようとした。しかし、保護者の協力や彼らの高校野球をやりたいという思いに救われた。離れていた選手や、離れようとしていた選手はやっぱり高校野球をやりたいと戻ってきてくれた。そこからチームの雰囲気もゆっくりだが、徐々に上向き、それと同時に練習を続けてきた成果が体力面で現れはじめた。その余裕から選手間でどうにかしようとチームのために動く姿が見え始めた。そして、シーズンオフをむかえた。

12月にはいり、実践的な練習から体力トレーニングや基礎的な技術練習にシフトしていった。選手たちは、もう秋のチームの雰囲気に戻ることはなかった。それは、気持ち切れそうな選手がいるとキャプテン、副キャプテンを中心にいろいろな選手からフォローする姿が見えはじめたからだ。選手同士のミーティングでも、自分の意見を言える勇気をもった選手たちがどんどん出始めた。12月からはじめた走り込みも最初は3Kmからだったが、徐々に積み重ねていくと、180段の階段ダッシュ10本や大楠山10Kmコースを走りきれるようになっていった。5kmのタイムも5分以上速く走れるようになっていった。体力トレーニングもいつのまにか倍のメニューをこなし、振り込みの数も土日の練習では1日1000本振れる体力がついた。他チームと比較するとどうなのかわからないが、彼らの中の成長は目に見えてわかった。ただそんな中、ケガで長期間、練習ができなかった選手たちがでてきたり、周りの選手たちの向上心についていけなくなり、休みがちになったり、部を去るものがでた。その時は、さすがに選手たちの動揺は激しかった。それは、寂しさはもちろん、これからの不安や自分たちの力の無さを感じたのだろう。その気持ちから冷静になれず、周りにイライラした気持ちをだし、指導者にもくっつくこともあった。でも、選手だけでミーティングをし、目標を確かめ、去っていった選手への寂しさより自分達が自分達を目指す高校野球を選び、同志を待つことに決めたのだ。彼らは、うまくなることをあきらめようとはしていなかった。3月に入り、いよいよ実戦練習に入っていく。彼らの夏からの成長は、まず体力がついたこと、送球技術、捕球技術が丁寧になったこと。歩かず走ることをはじめたこと。自然と練習中に声がでるようになったこと。練習後も自主練習をする選手がでてきたこと。トレーニングをこなすだけでなく、自分で考えたより負荷の強い練習や効率のよい練習を指導者に確認をとりながら、率先してやりはじめたことだ。まだ勝負するチームとしては、チームで戦う意識、周りの状況を見る力等、まだまだ足りないところもあるが、保護者の助けも大きく、選手達の力は確実に上がっている。もうすぐはじまる春の大会にどんな形で彼らが表現してくれるのかを考えるとワクワクする。彼らのここまで継続した努力を評価しつつ、まだ夢をみることができると感謝し、彼らの春への挑戦に期待したい。



○ インターン実習

日本ウェルネス専門学校で野球を続けていた 31 期卒業生の安田君がインターン実習として、夏休みの新チーム発足、間もない時に大楠高校野球部に実習生としてきてくれた。当時の姿を知る指導者は、彼の成長に驚きを隠せなかった。野球技術は、見違えるほど向上していた。また、人間としても大きく成長していた。卒業して実習生として帰ってきてくれたこと、成長した姿を後輩たちにみせてくれたことだけでなく、後輩たちへ実習生として、丁寧に指導をしてくれたことに感謝したい。さらに、彼は卒業後、企業での社会人野球に所属し、野球を続けていくとの報告をうけ、彼の活躍を期待するだけでなく、在校生の卒業後の進路としても大きな希望をもらった。



○ 卒業式

平成 27 年 3 月 3 日に 33 期大楠高等学校の卒業式がおこなわれた。卒業式後に野球部で集まり、3 年生の最後のミーティングをおこなった。ミーティングでは、卒業記念品の 1 つとして、試合や練習で部員達の様子を撮りためた画像と部員たちが夏の大会をおえて振り返った気持ちを文章にしたもの、指導者達が 3 年生に送ったはなむけの言葉をスライドショーにのせ、映像を DVD に編集したものを全員で鑑賞した。

3 年生たちは、過去を振り返りながら、未来を思い描き、今を堂々とした姿で在校生たちにむけて挨拶してくれた。3 年生のキャプテンの挨拶では、大学に行っても大楠高校でやってきた野球を原点に大学でも大好きな野球をやらせてもらえることに感謝し、がんばっていきたく強い意思をもった口調で語ってくれた。3 年生の進路は、就職 4 名（自衛官 1 人）、専門学校 1 名、大学 1 名と 6 名全員決まっている。彼らの今後の活躍を期待したい。

【 先生たちから卒業生へ はなむけの言葉（DVD から抜粋） 】

- これからの人生は高校野球の延長戦。三振もすればエラーもする。でもそんなときには大楠高校野球部での日々が必ず君たちを支えてくれるはず。グラウンドでの口癖だったかな？

「日々前進」・・・振向く暇などない。何があっても常に前を見て一歩進め。

「リカバリー」・・・失敗は誰にでもある。だから立て直しが大切。プレーはまだ続いている。

「フェアプレイ」・・・気配り心配り、正々堂々戦え。卒業おめでとう。そして頑張れ！

【 黒滝 敏明 】

- 大楠高校で野球を 3 年間やりきった、この経験があなたたちの大切な財産となるはず。1 日 1 日を大切に、悔いのないように生き抜いてください。そして、グラウンドで見せてくれた輝きを、今度は社会で見せて活躍してください。3 年間で見違えるほど立派に成長しましたね。あなたたちに出会えたこと、あなたたちと過ごしたことを誇りに思います。一生懸命、必死に生きてください。

【 大川 靖光 】

- 3 年生のみんな、卒業おめでとう。みんなが 3 年間一生懸命取り組んできたスポーツは、「高校野球」という特別なスポーツです。これから社会に出ていっても、高校野球をやっていたという「プライド」だけは決して忘れないでください。つらいことやくじけそうなことがあってもそのプライドを胸に「俺ならできる。できないはずがない！」と自信を持ってすべてを乗り越えろ！大楠プライドを世の中に見せつけてやれ！

【 馬賀 大祐 】

- 不安な気持ちのまま、はじめて大楠高校にきて、グラウンドをみて、感激し・・・あなたたちの野球をしている姿をみて、夢をもらい・・・あなたたちの言われたことに、すぐにチャレンジする姿をみて、勇気をもらいました。夏の大会は悔しかったですが・・・、楽しかったですね。黒滝先生たちがいて、あなたたちがいて、そんな出会いに感謝しています。ありがとうございました。『 高校野球は生き方 』です。今後の人生を一生懸命に楽しんでください。

【 山崎 滋彦 】